

野上 隆君を追悼する

渡 辺 邦 博

人格高潔，才気煥発などと言った紋切り型の言い回しは，彼の事跡を活写するものではない。彼みずからがそうしたステロタイプの思考を好むことはなかった。また，学者としての彼の領域については，寄稿された方々が，明らかにしてくれるはずである。

音吐朗々，豪放磊落，大胆不敵，談論風発，彼には四字熟語が似合う。まことにメリハリの効いたその言動は，会議の折などに遺憾なく発揮され，その場の落としどころを誰よりも早く察知していたから，彼のいない近頃はつくづくその存在が思い知らされる。

また彼は，少なくないニックネームの持ち主であった。「不破君」，「ちりとてちん」，「岡光」，「入道」，などなど，解説は不要で，それほど存在感があったということだろう。

彼の生い立ちについては知らない。私の知る彼は，大学生以降のそれである。入学直後の彼はほとんど校舎には来なかった。たまたま第二外国語のクラスが同じだった私は，地下街や喫茶店で，時折彼のご高説を拝聴したことがある。私の三畳間の下宿とは異なり，どういう訳か公団住宅に住む彼からお茶に招待され，器用にパーコレーターから入れてもらったコーヒーをご馳走になったこともある。彼の本棚は，使い込まれた道具や書籍がきちんと整理されていた。『暮らしの手帖』のバックナンバーがかなり揃っていたのを記憶している。田舎出でおくての（彼もその実東北の出身だったが）私は，次々と彼の口から出てくる専門用語に，感心させられることもあった。小野義彦教授の『戦後日本資本主義論』は，箱から出され，カバーもなくなり，随所に赤線が引いてあった。彼のスタイルである。

しかし，時折私に繰り返されたオルグも功を奏さず，結局私が彼と行動を共にすることはなかった。

故あって彼は，私よりかなり遅れて大学院に入ったが，私より先に学者としてのスタートを切った。3度目の職場として本学に来るのが決まった時には，驚きと親近感の入り混じった複雑な気持ちになったものである。しかし彼が赴任して以降は，私の方がつねに輸入超過だったが，かなり親しくしてもらった。彼には及びもしなかったが，あたらしもの好きな点が共通点となったのだろう。パソコンの使用，CS放送の受信など，彼から教えてもらって開始した私の趣味もある。今の私はパソコンの部品交換もする。

彼は3度リーダーシップを発揮した。1度目は学生時代，2度目は最初の職場であった八代学院（現在・神戸国際）大学，3度目が，何度も思案を繰り返した後だが，数年前までの本学

である。ついに袂を別かってしまったが、「結局こう言うことが好きなんや」と語る彼に、妙なことだが、「ホッ」としたのも事実であった。病を得てはいたが、彼の組織者としての才は見事なものであって、それに先立つ2回にわたる采配が推して測られた。

かなりご無沙汰したと思っていたが、わずかに5年ほどしか居なかった青森時代にピリオドを打って奈良で再会した時、二人の飲食を見た外野の評価は、「全然違うふたり」だったらしいが、まことにデコボコ・コンビだったのだろう。学生時代の彼は、小野義彦先生のお考えがその背後にあったように思うが、山田型、野呂型を比較して、よく野呂をとると語った。先見の明があり、物事を弾力的に捉え、すでに学生時代の考えを清算するに至ったと語る彼にそうした物差しを当てはめるのは心外だろうが、講座派的な発想は、型にはまって融通性のないものに映ったのかも知れない。しかし、物事の断面を巧みに切り取る天性の才能を持つ彼は、他面でタイプの変化を執拗に追跡することはあまりしなかった。その点では、むしろ山田型だったと言えるのかも知れない。

political matron という言葉がある。「世事に長けた家政婦」と訳すが、近頃「止めとけ、止めとけ」と言う彼の声が聞こえてきそうで、我に返ることがある。

(奈良産業大学経済学部教授)